



明治十年二月改  
 第百六十七号

愛知県文化会館

410130

W9143  
 E2  
 410130

煙編

うろ衣

煙草説

三松翁  
 藏書記

我々の積れ初めきとして腰は茶瓶も持てて秋の  
 薄暮の淋りきとして棚の煙ももれとして只この  
 煙草はまゝとあつて此詩酒の三つももつてへりて  
 埃のええ杭ささうしてうろ衣もさすの目さきとして  
 乃煙草首也してうろ衣付錠は待宵あつて達磨九年  
 の夢にむくく炭団の空室を悟り西坊ハ柳陰り  
 志す火打の光と雲むされと出女のまきとらうこれ  
 乃煙にむくく口紅元さして吸うさかつかつていさ  
 んと煙の煙きせる小舟さして葡萄くさつ乃

月と詠あゝ大法へ吸々投々よりうゝ公のされ  
やゝあゝむやゝあき唐菱は緩子張の煙を盃と  
あゝ月影を引く〜さより路折れ体合子吸口包  
さゝハ〜く〜風流あねとさ〜祥義合あゝるゝ  
丸へ〜只あゝ〜の松陰はた〜〜〜〜〜  
せは茶をの嚙のさ〜むねく蛇〜〜葉火もあ〜  
さ〜出一〜一瓢千金れ〜〜〜〜時とりかやま〜ハ  
雪をる〜く〜の〜〜〜先の後場〜い〜〜煙打の  
ま〜〜〜〜〜〜〜〜吸〜〜〜〜〜煙  
母、飯の嬉あり〜〜〜〜〜〜〜煙よの純  
もむ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

り後一

まゝの雪蓮よあゝ〜〜〜此の不定せむ酒  
富貴ある者あり茶ハ屋造ある者あり〜〜〜  
つら忍子の湯はあゝ〜〜〜用む時ハ一度に言と起〜  
あり〜〜時ハ押れう〜た張る〜〜〜秋影の傷あり〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜稀ある〜〜〜〜〜〜〜〜〜吸心は  
も吸〜〜〜〜入の風流甲よま〜〜〜〜お物さき  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
山の初をよ〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
りあ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
安候〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜



菅井記

つのもやしとれ菅井ある山通泉よりおあり年ころ  
ちやうどお庭のこころをいふとせりくは七月の  
ちよあたり屋敷と舟出くまをにらむあや川  
よつらうをさしむく山のむす

あや川は夕のまじり

このまはく家もあらに落のまけと酒もあ  
深ハ秋の光のまのこ秋まれさくさくさく  
このこさささささささささささ

誰さくく廟の繪せれ花づく

山よりいづつ家あくく葉あくくくくくくくくく  
こくくくく外隣あき岩く岩

うき二

それよりハタシてき細くあきまふとついで谷を  
こころて雲より雲よとけ入はせ世の外遠くくく  
お地くくくくくく山の中をさくさくさくさく  
似もやうく湯本のやまはくく二十まくくくく  
乃のあきつきくくく古きあきくくくくくく  
女もくくくくくく糸竹ま岩をさくさくくく  
多野山くくくくく山峰の松風も三線ま音どうく  
谷水も脂水のくくくく濁くくくくく外山のま  
りく今年にこくく入のあきくくくくくくく  
さくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく



さすにぞい出もおもあつてしり一思ふの家の名も  
橘をよみよにきしりのやうりかきして若はる裸一き  
さすにぞい出もおもあつてしり一思ふの家の名も

さすにぞい出もおもあつてしり一思ふの家の名も

田の口子

湯の山やみきにさす深ゆこ

幕ハ湯にゆつて秋の松の枝

山の上は藤野をあり之岳寺と名のみこしり

回祿ありなる後いそそるにりあみてははる借も

咽られよつてハ堂をれ男あは法座ふあはさうり

借つきや刺くぬあむを花柳

六日さりの月山のまにさるく風も湯ありの身も

二五二

しむさうり踏舟のうアありまは鹿のけり返くゆ  
つた

笛をせぬ湯下野ももる鹿のけり

つたくちまうりうごちまうり白ハとこらみあうりけりま大石と  
まにさるあり

交棒く積を月まむ石れ上

ま湯よいつりらの山をへるく西よりな

ま湯やぬまにま音まく初あはし

この山下あやさ廿火あり人の亡魂さうりいつしよ

しり環とあはるもあつて秋の風

我名まつみ人の名もさる物さるのさるさるれかの  
りいさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

あまこといつる魚よりまるとさよふ人もあつちや  
こゝに相らねといふあつちの樹といつるまき借あり  
下あまの家残ふとさして淋さはまきくつさくとも  
あれりさる日教も二出さるり今バとてつる日雨は  
わづら

湯まぢぢり一杖の男中秋の雨

さうりのさゆもほのさひまもやとまつけるはバ乙亥の  
年にちんきる

飛天老彦之條賛

陰浪の月とあはほにおひひ一らわは茶は花  
へしと二つの月にあくさむハ雲を彦のあまうこれ

さあまきとてに替へし

酒は待茶に待りて月二枚

とつるハもの友紫原甲れ某々わづらに意をもちり

浮奥別株人辞

米坂の米由と詠く株人雅伯、  
謝り辞也

世ハハ芦垣の石ちさ軒さあへくこよをあらぬとつハ  
まつらとてあまきいあらを遠き浮奥のくもさあ  
かとうり一句と添くくの他の巻あゆりさやあ  
祝と誇りありぬあや一志の又ま標しれあん我  
あまのく人さるりやとこのほせ一風ああよとて  
そのほよまぐる騒を島彦主の何り一やのあ  
しむ在たりある序々我名わしわつよりと俳門

乃をありとて奪せりつゝとてされて我及るべけん  
 か入きてより蕉門の人々もまけと皆十年れ舊相知の  
 こゝろぞつゝうさつゝ我あつゝももをのあつゝいふ  
 うさつゝまけのいふをらむ〜御六神にくらま〜り  
 あるも遠きあのちあせと〜あ〜のふのち地〜まれ  
 じ〜あき版た〜ちあ〜る

してやこのあきけのつきけつよ〜ハ松の烟のま〜り  
 とこれと文彦の朱砚ハ定めぬ世とあつゝ〜まあま〜  
 はぞ〜風鈴れちま〜り〜ん〜れ〜り〜

朱砚にまつよ際せむ空なれせむ  
 ちかちき中ノ奥羽ハ杉栂の〜ち〜て奥の

細谷の径りとあ〜り〜の句ハ人の平口は狂せ〜  
 こ〜い〜あ〜〜ま〜り〜も〜も〜〜とは友にな〜れ  
 ち〜あ〜れ〜あ〜ま〜も〜あ〜〜と〜人〜と〜欲〜る〜形〜れ  
 ち〜の〜も〜い〜〜〜一〜交〜の〜も〜も〜る〜り〜あ〜の〜十〜字〜れ  
 ち〜の〜い〜ま〜を〜め〜む〜あ〜〜あ〜ひ〜の〜あ〜も〜浅〜く〜む〜され〜  
 秋因の一首とど〜り〜一句ハあ〜の〜人〜に〜ゆ〜〜と〜  
 ち〜あ〜〜〜

ち〜川〜ち〜ま〜に〜は〜秋〜の〜風〜

一色亭記

豆別熱海は富君の御湯と云ふまなつより  
 あり求よ〜り〜く〜記を

祈り浴〜詠〜く〜む〜と〜祈〜る〜い〜は〜せ〜の〜う〜ま〜あ〜で  
 秋も〜る〜入〜の〜羽〜あり〜ま〜り〜は〜け〜あ〜〜れ〜湯〜か〜は〜二〜月〜さ〜り



のやうにさうぢやあつとさう我もあは母にさうい  
まのまて身の時あつとあは猶ほあつと舊病寺の折  
されく疝氣れ腰を温泉に浴一ほせれ舟を問あは  
洗よまねとけ里れ地をさうい出うこみ海にわさうい  
波つちさういよさうい月の夜まに松をまよせと鹿の  
まを巴峽の積にまうい雨のつちさうい血さうい鯨の  
刺刃松江の鱧を耻を伊豆の於山まよせつと久さうい  
のうい山勢カがひ紅僧正のま眺く多魂さういこち  
舟一く旧迹さういさ沖の小まよハ朝夕にまねとこち  
大まよハさうい波つちさうい雪時さういあつれまよさうい  
さういさういさういままよまよのさういさういさういさうい  
をいれさういさういまねとあつとに東面さういさうい湯入

十六

あめの目とさういさうい中よほまを氏某々高ふをさうい  
さういさうい楼はさういさういむい佐文山こまよまらさうい  
こまよの影まよまよさういさうい一色真下の名にさういハ  
膝王崗の越ありとやさ霞孤鷺と齊一く飛いとの  
長天と共さういゆつとの秋も今に一く浦のみさうい肝端  
まよさういさういあくまあつあまの底のまよとさういさうい  
よみまよまよさういかりりてあまもこまよにつま一くまねと  
さういさうい人もこまよとせまよさういさういさういさうい

いあつてまよまよまよの浦の月

と今画替

かさうい小町さうい刃の馬もあつと縁讓忠のさうい



寂しきこころの例の清らら〜の〜く〜まに〜ま〜ま  
袂とぬ〜〜〜又一盃とあ〜〜の〜白を心乃  
語れどあ〜〜〜〜〜

呼つまれば君にいらよしの月をぞ

蝶の舞

蝶〜〜〜ま〜〜〜飛〜〜〜家〜〜〜の〜あ〜〜の〜  
の<sup>縁</sup>われ〜もま〜と家筋〜の〜あ〜〜ら〜は〜よくあ〜げ〜も谷を  
傍〜の〜あ〜ら〜は〜よく宜あま〜も掩〜の〜あ〜ら〜は〜よく  
走〜し〜も人と免〜る〜の〜あ〜ら〜は〜は〜と〜れ〜あ〜能〜  
〜〜詩〜あ〜ら〜は〜も〜ま〜に〜何〜と〜あ〜け〜も〜ま〜

伶々け〜も〜つ〜お〜く俳諧とれ〜も〜下〜ま〜り我のま〜り  
お〜ら〜あ〜ま〜と〜〜〜〜〜〜名〜の〜う〜ら〜ま〜老〜  
〜り〜今〜ら〜の〜芳〜の〜あ〜と〜こ〜ま〜り〜他〜ま〜ら〜ら〜は〜ひ〜  
〜ら〜く〜人〜の〜詩〜を〜い〜り〜は〜さ〜も〜あ〜も〜は〜は〜  
〜〜〜よ〜ら〜は〜よ〜ら〜こ〜ら〜ま〜手〜よ〜〜〜れ〜は〜  
〜ら〜へ〜く〜も〜我の笑心とあ〜の〜あ〜り〜

二日月堂記

塵大老撰歌集

と〜か〜人〜の〜ま〜に〜あ〜〜〜胡〜を〜も〜の〜こ〜を〜の〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
あ〜ら〜も〜あ〜ら〜も〜あ〜ら〜も〜あ〜ら〜も〜あ〜ら〜も  
い〜つ〜〜〜人〜の〜こ〜の〜ま〜ら〜り〜〜〜



こゝろはいつへもなれなれとあはれは一生のやちつふなれと  
け府下りては行く一巻のうらみとよして其まね  
まされさうはくさうなれは一句の……あんなに松とての語  
物の上のつらさのなげのねもつらさく丹生の歌を六浦  
のゆみちも今ふらふら……きききき……あんなに……  
ずん……く……の月……の……な……な……な……な……  
と昔と……い……あ……あ……あ……あ……あ……あ……  
へき……と……あ……あ……あ……あ……あ……あ……  
堂……名……つ……つ……つ……つ……つ……つ……  
雪……上……の……屋……も……あ……あ……あ……あ……あ……あ……  
あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……  
と……二……日……月……の……二……日……月……あ……あ……あ……あ……あ……あ……

と後

いつもけきに濃う……

積り……に……磨……つ……つ……つ……つ……つ……つ……

おの像 琴々

るは方池のつらさの……けつ……つ……つ……つ……つ……つ……  
松の……月……の……あ……あ……あ……あ……あ……あ……

音曲説

々板朗詠と……る……む……む……む……む……む……む……  
備……る……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……  
幸……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……  
と……一……交……ま……く……の……ゆ……も……を……一……二……交……と……ま……へ……

りはら諱らゆもの上中のもてあらひゆるりてきまり  
たてなきに法制をあらう者そのまゝいかに古今に  
変化するこれこそと預かり人子よりのまじりてきまり  
くしとて商人の上まじりてきまりしちのまじりても御宗  
ともあらひあつてきまりても益の底あらふ地をあらせ  
たりと各人の意の席にこの職をのり出しされも大地  
と上下の位に定らむとも時あらぬまじりてきまり  
と上も各ほゝもあらふ一居のまじりてきまりのまじり  
かつりてきまりてきまりとあらふとて眼と眼と  
あらふ扇に摺の上を斜なりあらふ乱酒の打やりのまじり  
てきまりてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
一居声とありてきまりとてきまりとてきまりとてきまり

う後十

こゝに桂と似てうらや中とてきまりとてきまりとてきまりと  
多きゆきとてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
らひあらふにまじりてきまりとてきまりとてきまりと  
挿子とてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
あらふ似あらひあらまじりてきまりとてきまりとてきまりと  
とてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
これとてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
浄まりとてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
こゝに五十年のまじりてきまりとてきまりとてきまりと  
まじりてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
とてきまりとてきまりとてきまりとてきまりと  
あらふとい義理と虚実の入継と二まじりてきまりと

むつゝく不故迄ある老人の年ハ昔も無むあつて  
 として之辰目の愁ハあつりの程と詠してして  
 法より外の事アそあききことどもてあつて人の外の音曲  
 とハあつたりてくぢひえへハ上ハあつたりてはくはくハ  
 あつりてあつりて日録庚申に丸つてしてして燭臺の法  
 ハ衣袂きまつくうひ聖は兼あること例月にくけく  
 ことつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 たり汗のこひ湯とのこひ極よつたりてあつて人の  
 つきぢうひひひひひ世にあつてひ出くしてあつて  
 よろきハうへあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 とくハあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 縁組のお後ハあつてあつてあつてあつてあつてあつて

二廣のちけあつて年も三十してつてつてつてつて  
 分つてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 とくあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 契の細うへへ上代のきくくくくくくくくくくくくくく  
 ちあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 百端は音を序はてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ちあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 まつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 よろきハあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 の舞ハあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 よろきハあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて







門と出く東北の方をうらく十歩の枝と曳けて指込  
 万尋の山横切れ眼下千町の田つちを村落畫圖  
 乃中子入る南の言々の本林はく雪法の浦風しほく  
 とや勢田沼も名のこゝへまは交あつぬ日も多うり  
 ちくゆゑぬれ路なりとも細りくやうつ声虫の香もよと  
 たりハあきか地まうハ秋きの里も近りれとちやう一  
 年られ年うり坂の杵の杵のまはくもる山峯も近  
 ちくうののくへま世れまよ一〇二〇もさおくれはあ  
 さんた片々まらねりてれともむかへぬや亭とよよ  
 するの藤氏、赤尾も智ら守りてり 夏門のあられま  
 退りて品これ定唐工似これとちやも病の老母  
 ともあひあうまきこりさたおらまあるまはあられちひ一

侍のうとく我ハおゆきとそむかとこもまて府藩の辰巳  
 あれま世とらりゆと人ハいふらんう

百魚譜

人の武士程ハ槍の斗魚ハ鯛とさみ並りる世の人乃は  
 こそるそののちやゆくある物をさふあれともい魚と  
 ちて調味のや上とてむじま答あるへこもさうけく甚  
 子存る男ウリとく舟子似るへくもな一 ちうとせちわら  
 よいはうててこくに堂家の浦漁もゆへんせんふちふ  
 りの仙人もあーそれと夷之舟をゆの地の葉ぶ若者よ  
 同しうけとてとととととと約もこれぬく勢と鎌の司  
 としハ合味をうぬる御座候とくはらにこ料理



せんと学あひくも人ハむり一思あるもなごもくんととてめ  
しり

徳門流エのわんとなり及まうとあけあうも大聖  
のゆきよもけをこつとせあつるこれ世のなすハの綱は  
逆をむとすうれていりある幸ふもあつむ味の美ありと  
いへも綱の料理のふもあつるふもあへくもや一乾也  
多物にせは糖清汁によう一とすりらる蒲餅  
こ用ひくく糖も糖子も調を以て品一とあつ也ま  
まるハ力能と耻といひりん中とあまれととるふや若  
平ハゆと悉七兵未景清と名宗と今成るハ位子と  
威をへく朝比奈赤雲コ肩とあつるとすあつり記  
記の上りてハ志細ころ雲の外ハせの働るくく只

二序まあしめがまわありつちあは侍ありりつ子世  
名れこく一きととある人評しつるものありけ  
く七系うたあの一

おねの右寿我朝もあつてす張氏ハ是と杜風  
さりとく仕途と辞一平定あつて船中ハ極く官路  
進む進退いつれさうやむへす

船ハ近江子洞庭の名とくくくり鯉ハ似く位階お  
まりの名ハハ知まふさうくこれと繪ハまは定数  
あれり

柳ハ岸たらのはゆとすやこれ梅咲しつと世に句  
軽ハ初秋に祝うれと空世の蓮のそんやうな後  
是れの契しんのか

鯉ハ芥子鮓の風味上戸ハ千金カツル山もぢぢぢ  
と謙美れ海のまじ性と並ぬべいひまはれしん  
口ハ鯉師と有りてハ其れ鮓のやうしんぢぢ  
その物しんぢぢと花のまじり世にぢぢ  
ぢぢ

鯉の唐ウヰく子細らきまづ一ぢぢぢぢ  
一ぢぢぢ料をぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
鯉ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
かハウヰのぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
のぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
鯉ハ越ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
雪公漆くぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

鯉ハ芥子鮓の風味上戸ハ千金カツル山もぢぢぢ  
と謙美れ海のまじ性と並ぬべいひまはれしん  
口ハ鯉師と有りてハ其れ鮓のやうしんぢぢ  
その物しんぢぢと花のまじり世にぢぢ  
ぢぢ

鯉ハ芥子鮓の風味上戸ハ千金カツル山もぢぢぢ  
と謙美れ海のまじ性と並ぬべいひまはれしん  
口ハ鯉師と有りてハ其れ鮓のやうしんぢぢ  
その物しんぢぢと花のまじり世にぢぢ  
ぢぢ

鯉ハ芥子鮓の風味上戸ハ千金カツル山もぢぢぢ  
と謙美れ海のまじ性と並ぬべいひまはれしん  
口ハ鯉師と有りてハ其れ鮓のやうしんぢぢ  
その物しんぢぢと花のまじり世にぢぢ  
ぢぢ

ちく猫もちく鼠もいじやうもさうらこまねの  
まの地定の侍士きき〜〜  
御ハ新川の篝火にま〜れ給ハ濁江の瓢箪におく  
らのは白魚ハ目の中を裏表とあ〜〜海草ハ花  
先もあ〜

齒も〜〜  
海月のあまハいまた〜

こも皆の入屋ハ毒ま〜く〜と〜とあ〜  
の御毒ま〜は又さうりカとも侍〜と一俵の口ハ  
あちられあ〜〜まの法師の刃の果ク如

ま〜〜と〜とをれ〜と〜とと産物の程優ホ  
つ〜れね〜と〜とをれ〜と〜と

世ま〜と〜りか〜ま〜と〜と益あ〜と〜と  
口〜と〜と〜と

餅餅はよりハ〜と〜と〜と大男の餅口〜と〜と  
〜と〜と〜と

波ハ〜と〜と乃 面宮き〜と〜と甲ハ破ハ城をかまひ  
〜と〜とに候よき人ハ〜と〜と野暮ま〜と〜と  
あ〜と〜とこれ〜と〜とヤマ〜と〜と

味籍ハ酒の上ハ味暗〜と〜と調〜と〜と  
〜と〜と〜とれ白味暗〜と〜と大〜と〜と  
〜と〜と〜と

飯ハ〜と〜と名をれ〜と〜とあり〜と〜と  
てあ〜と〜と毒とあり〜と〜と味の〜と〜と毒の世〜と〜と



そつれうれとわ人とすうがもいひたりぬ人と  
そつれとわいひたり

彌といふもの、味いこころにそつれされとも崑山のや  
は玉と雖もエらんと多きうなまのりまもくく骸ハ  
田島のこやとあるとも此門とすうく天下の鬼  
を防くを功解鶴も及ぶ

されと主人ハ多中四李とすちつと魚は四時の鉄  
鏡也一俳人兼く魚と品とすうハカつた味ハ  
貴族と捨りありあつれとすうハ其自の帯よ  
と、ありく今ハ世界ありとてとさりに似れと  
この帯よ、言ハ草とものりてよみく菓の是乃  
ううくきとおの所治よ及も言ハ草よあよよ

さるや、辛りに只借しと人のつひるさるまき酒  
あつとありとつり

葉山子辞

わいとせーおてのいよ葉山とて、山田の畔より  
ひりりひりりあつとわれとるいよ葉山とて、柳の  
りりり例の口さうまくとてひりりハ巻由ハ百歩ハ柳の  
とさうまハ葉山の管弦と雲乃うハひりりを抄取ハ  
を射りよの外云持名士乃弓氣功あつと、此の聲を  
おろくと世に名をとりたりちんちやあやの竹は徳を  
て射りよあつと、此の歌とらりり我少事とあまむんと  
るりや葉山子とて、こころいひりりあつと、あつと

うく射る時ハ中られまうもさつれまうとさつれまうとよみまう  
分のかさまうさやまの奥州の鳴弦も夫をばさして  
使はあうりそり 襟ハ角とさうとれとも肉ううと物を  
やうはむう石葉乃言射も亦を刀に刃の誰とのうれ  
「さうさう」とくハハち免れさつれまうと物とやうり  
さうまひく後との功とさうまうさうハ吾れのをれまう  
ソウやうの彫とさうをゆりまや九方甲におううく  
翼垂天の中におうさうさうさうさうさうさうさうさう  
よくさのかさまうさあうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうの大彫れさう羽ううハさうさうさうさうさうさう  
斤路れまうさうハ飛かかへるさうさうさうさうさうさう

実とさうさうさう世に疼くさうさうさうさうさうさうの齡ハ  
こさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
矢にもうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
求さうはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
それともさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
あてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
愁さうまうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
乃福さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
ゆり刃にあきさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
棹さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

拾時と云々ぬき山子の弓矢うね

とねくくまふ心とて事山子程ふいふくぬり  
こまに似く又ふらんとしられまをまを請りや  
兼てとりやまふれにしふあふれとけふふ  
まけとてくまら

牛ふまにこれハ舞してのつれ  
あふまはちりかーあふま

赤瓜辞

むくつけきやくへもひきとてんも伏格れやきーま  
花ハマしてタウられんあましてまあつととじわのへつ  
りけくま世とをまらまも名のりるより流氏のぬ間も  
とく

まらけきやくへもひきとてんも伏格れやきーま  
料智よつらうまらてあつらうー持てとてや  
俳諧呼々りうひよりくこつぼはま信せしるま  
その味ひのまあふれと物もあまをばりてられ辨  
坊まらみくらひと溝の人とてうこうす

赤瓜のしるまをまけも赤瓜うね

程又いしきと丸丸の葉まらうてこまにけむ乃  
まらまらまらあつらうむらーあれははにまら  
楊柳観音のありふまら世粟柳やれ柑子まら  
まらあきあまらのかまをくまられつ白勿のらま  
まら医者のかまあるまらまらまらーこれまらまら香  
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



垣子 魚らまきくふあーもぬる林

百虫譜

了の花を飛いしるるやこまものうまうのうへ  
てはつて啼きのおもひはをををよらうへむオウ  
程かていられさてしを莊周をまじりあはれ  
只とんちのうまうとれらやうまうあつた  
うまに糖にされくまれあてあまひとあまう  
まをよあうのままにつあううまう  
澆く如美人の眉をうまう蛾といふ虫もある  
まをあてうまのうまのまをにひれく  
まの増の地の虫をうまう我うとあう老のうま

うま

うまうとまもあうまうまうまうまうまう  
我うまうくまうまうまうまうまうまう  
まをねまうまう詩人の稱うまうまうまう  
まをまうまうまのうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう

蛙ハ古今れ序にうまうまうまうまうまう  
しとまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう

まうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう  
まうまうまうまうまうまうまうまう

とも初らつともいふをまきつけおくり初ぎみか  
 りつゝとて大まおんまのちあはせつゝとてふぬりまふ  
 りんよとておめへうはな酒の一向をそつゝとてふは  
 あつゝとてふはまのちあはせおのちか上あつゝとてふは  
 といふいふにそつゝとてお月の酒をへはここのおのちか  
 ちてとてそつゝとておのちのちかたへへはここの油火の代  
 せらぬいへはつものちまふあつゝとてふはさつゝとて  
 よろせつゝとてふはここの外のちかたあつゝとてはつゝ  
 といへつゝとて  
 日へつゝとてふはつゝとてふはつゝとてふはつゝとて  
 つかつゝとてふはつゝとてふはつゝとてふはつゝとて  
 つゝとてふはつゝとてふはつゝとてふはつゝとて

此物にあつゝとて世の謗にいへつゝとてふはつゝとて  
 中へつゝとておつゝとてふはつゝとて

蜘蛛といへつゝとて綱をむくといへつゝとておとせ

せんといへつゝとておつゝとてふはつゝとて退屈のつゝとて  
 ありといへつゝとて奸賊の心なりといへつゝとておくつゝとて

此物のおつゝとておつゝとてふはつゝとておつゝとて  
 あつゝとておつゝとて座をれおつゝとて軒を降るおつゝとて  
 けけつゝとておつゝとておつゝとておつゝとておつゝとて  
 くおつゝとておつゝとておつゝとておつゝとておつゝとて

あつゝとておつゝとておつゝとておつゝとておつゝとて  
 おつゝとておつゝとておつゝとておつゝとておつゝとて  
 おつゝとておつゝとておつゝとておつゝとておつゝとて  
 おつゝとておつゝとておつゝとておつゝとておつゝとて

あゝはゆむ——とらふ虫にあらんとかくまわれど人も  
あゝ〜〜きつりり

蠶乃せ涯ハ世のたゞ終りたてなりむハ——ハ——とよに  
刃をこころけや壇権ハさうあき——にひくれ夢  
くむ——ハふゆとまき乃詩とみれうこハ俳諧らる

こゝと俳諧とぬ人のくく——おもあ——  
あり室のたよにゆれくむハ——ハ——とここの

虫ハ——  
ほハゆれれみしそ——世のいともみハ深き人ハハ  
似たり東西ハ聚散——餌を求くやまといつう槐安  
の都さのゆれくもの刃の安きすとゆむ——りもここの  
あき——に宛とい——とく——千丈の院と朋をへは

三二

權ハ歐陽氏ハ悟まれ底魚ハ世浦子ハありゆまる  
狗の歯に透くそハ——とて猿のまに——  
ら——風ハの——み——と——

風を千の歡喜と呼ぶハ地獄ハ権宗とら——とら  
権宗ハ吳名やうやけら——とまたあうや——と権宗ハ  
あ——

蝸牛ハ只まにまきもの——とまににむちらんは  
か——れ——もゆくま——と負ハある——い——中の安き  
も——

地性例のまき——とま——へ——に螺殼とま——  
のねまハハあ用のま——  
皆皆の瘦——とま——とま——とま——とま——



いつあつて人のつらさも出さぬいふあつて

懈のあまみよこつてはまのつらさもあつていふあまみよ  
を智にのつてくはあまのこゝろあつていふあまみよ

促織鈴虫くらゐいふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
よつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

ゆるあつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

いふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

まう……のまのつらさもあつていふあまみよ  
岸にらむ虫……のまのつらさもあつていふあまみよ

虫乃父……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

つらさ

父のこころのつらさもあつていふあまみよ

松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
いふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

ゆるあつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

いふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

ゆるあつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

いふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

ゆるあつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ  
松さ枝一人あつていふ……のまのつらさもあつていふあまみよ

この續を編ハせ有るの實保のそと能く  
 海老唐のそと之の比まきの遺福をよめ  
 抄出と  
 主簿 二 林

百人こころんま狂歌きやうか袋ぶくろ宿屋飯盛しゆくわいばんじやう撰  
 一首 古今ここん狂歌きやうか袋ぶくろ古今ここん合傳あいはん自注じゆちゆ  
 彩色摺巻さいしよく入いれ全一冊

五大ごお一首 東都曲とうと狂歌きやうか文庫ぶんく尚時しやうじ久松くわつ撰  
 彩色摺巻さいしよく全一冊

東風とうふう詩し草そう南畝先生なんしゆせいせい撰  
 彩色摺巻さいしよく全一冊

才藏集さいざうじふ改かい四方丈人しやうぢやうじん撰  
 狂歌きやうか才若集さいじやくじふ墨墨すみすみ若雅じやくが神秋かみあき慶賀けいが  
 全二冊

通詩つうし選せん七言しちげん古こ四方先生しやうほうせいせい著  
 彩色摺巻さいしよく全一冊

同 諺解げんげ 同作  
 中本全一冊

同 笑知せうち 同作  
 中本全一冊

狂歌きやうか鰯いわし 鹿都部かづべ真淵まへ撰  
 彩色摺巻さいしよく全一冊

不老ふらう不死ふし仙家せんか長壽ちやうじゆ臺たい四方丈人しやうぢやうじん撰  
 彩色摺巻さいしよく全一冊

狂歌きやうか十才子じゆしさい名月なげつ集じふ四方丈人しやうぢやうじん撰  
 同社申十八詩文  
 全一冊

狂歌きやうか故混馬鹿ここんばか集じふ朱樂漢しゆらくわん撰  
 全二冊

狂歌きやうか濱はまのの三さんつと 狂歌きやうかのの三さんつと  
 小本全一冊

狂歌きやうか新玉集しんぎよくじふ 四方丈人しやうぢやうじん撰  
 全一冊

狂歌きやうか百鬼夜狂ひやくきやまきやう 四方丈人しやうぢやうじん撰  
 全一冊

歌うた百鬼夜狂ひやくきやまきやう 四方丈人しやうぢやうじん撰  
 全一冊

小林氏竹

繪本武者鞋

北尾氏筆  
大本全三冊

狂評判記

名前の役判の評判  
名前の役判の評判  
全三冊

詞の花

喜多川哥磨画  
尚世風俗佐方  
全三冊

狂歌双六

元のりわし撰  
なまさんのねがひ集  
全一冊

数奇屋益

同画  
武若葉色づくし  
全二冊

狂歌福人双六

四方山人撰  
ましましり抄本  
全一冊

同 百千鳥

北尾氏画  
全三冊

同 曆便覽

全一冊

同 半字流

武者法  
全三冊

同 通言總籙

山東京傳作  
全一冊

同 吾妻扶

同 江戸名所  
全三冊

百人一首初衣抄

同作  
百人一首の初衣抄  
全一冊

同 江戸爵

喜多川哥磨画  
江戸名所  
全三冊

媚妃地理記

喜三二作  
秘町と法名のり  
全一冊

画圖勢勇談

鳥山石燕筆  
奇談と画もあつたり  
全三冊

氣のふし

同作  
尚世のし〜をぬく  
全一冊

古原新美入自筆鏡

北尾政廣画  
全一冊

座腹筋三略巻

一技掲

烟花清談

駿守専作  
浪遊屋客の秘話  
全五冊

小紋新法

山東京傳作  
お花のり  
全一冊

挿手毎の清水

殊をりあつたり投入  
全一冊

客衆肝照字

同作  
おまひのて〜をぬく  
全一冊

澁都洒美撰

右左のせせうけん  
おまひのり  
全一冊

遊君柳巷化言

物〜のふわ〜集  
ゆきせのり  
全一冊

契手管智恵鏡

らん入〜あて〜り  
全一冊

通神三教色

唐菜三和作  
儒化神のり  
全一冊

狂彙軌本記

さ〜れき〜り  
全一冊

書肆 蔦屋重二郎

江戸本町筋北六丁目通油町



914.5  
E3  
410130

史記卷八